

前期始業式

先ほど校長として就任したばかりだが、皆さんとお会いできて本当にうれしい。私のはじめのメッセージとしてみなさんと考えてみたいことがある。

統一地方選挙期間で、今週末には長野県議会選挙がある。この中にはまだ多くないと思うけれど、もし有権者の人がいたら、是非投票に行ってほしい。試験があつて忙しくても、権利を行使するのも大事。

さて、ここに1,000人がいるとして、生徒会長を決める選挙するとしよう。A B C Dの4人が立候補して、Aが400票、Bが300票、Cが200票、Dが100票、得票したとする。当然Aが当選となるところだが、これでいいのだろうか。

民主主義って何だろう。民意を本当にすくいあげるなら、600人が「Aじゃない」って言っているのに、Aでいいのだろうか。

2000年のアメリカ大統領選挙は、共和党のジョージ・W・ブッシュと民主党のアル・ゴアが争った。アル・ゴアは環境活動家として、かねてから地球温暖化問題の啓発活動にたずさわっており、「不都合な真実」というドキュメンタリーは世界に衝撃を与えた。のちにノーベル平和賞を受賞している。選挙は大接戦となったが、緑の党からネーダー候補が立候補し、票が割れてしまった。アル・ゴアの票は伸びず、ジョージ・W・ブッシュが大統領となった。アメリカは彼のもとで2001年の同時多発テロの後、イラク戦争へと突き進んでいく。

もし、アル・ゴアがこの時大統領になっていたらイラク戦争はなく、現在の環境政策は大きく違っていたかもしれない。

ヨーロッパなどでは選挙にいろいろな工夫がなされていて、たとえば1人が2票をもつとか、それぞれの候補の順位を投票すると事情はずいぶん違ってくる。多数決なんて、思考停止。絶対に避けるべきだ。

私は皆さんに、安易な方法で物事を決めないで、もっと考えたり、議論したりしてほしいのだ。伝統とか前例なんかにとらわれず、本当に大切なのは何かを見極めてもらいたい。

この3年間私たちはコロナに苦しめられてきた。感染対策を厳しくすれば、経済活動が強く抑制された。GoToトラベルのような施策を打つと今度は感染が蔓延するようなことが繰り返された。ある社会課題に対して対症療法的な政策を実行すると、その施策を否定するような副作用が必ずある。コロナ対策にとって経済問題は否定的側面であり、経済支援は感染防止に否定的な側面だった。このような相対立する二つの施策のどちらかだけを執っていたのでは問題は解決しない。この両方の立場をあえて受け入れて施策を考える力を「否定

性受容力」という。ある政策を実行した場合の否定性を受容した上で、さらにその次の一手を考える力が真のリーダーシップに求められるが、人間にはこんなことができるのか。

できる。かつて、経済開発と環境問題が長くこのような関係にあった。環境を犠牲にした開発がまかり通っていたし、環境を保全することは、人間の経済活動からはるか離れたところにあった。しかし、私たちはこの両者の否定性を受容する、クリーン・エネルギーなどの環境に負荷の低いエネルギー源を手に入れてきたじゃないか。

一見すると、答えのない課題に思えることも、投げ出してしまうわず、強く深く思考し、粘り強く議論してほしい。